

2018年度
関西学院大学ロースクール
A日程

一般入試（法学未修者）

論 文 問 題

《10:00～11:20》

○開始の指示があるまで内容を見てはいけません。

【論 文 問 題】

次の問題文を読んで、以下の各設問に答えなさい。

〔設問 1〕

この問題文で書かれている内容を、この問題文をまだ読んでいない友人に紹介して伝えたい。この問題文で重要と思われる内容を要約した上で他者に紹介する文章を約300字で作成しなさい。

〔設問 2〕

ポピュリズムは民主主義にとって重要なものとするか、あるいは危険なものとするか、あなたはどちらの立場をとるかを明らかにし、その理由を述べなさい。さらに、これに対して予想される批判を指摘した上で、その批判に対する反論を理由とともに述べなさい。なお、解答にあたっては、問題文の内容に加え、自らの考える理由づけに依拠してよいものとし、全体として約500字で解答するものとする。

問題文

次に、本章の中心的なテーマである、ポピュリズムとデモクラシーの関係について検討してみよう。

先に述べたように、ポピュリズムをデモクラシーに敵対的な政治イデオロギーとし、ポピュリズム政党を反民主主義的な政党とする見方は今も強い。ポピュリズムは「民主主義の病理」「討議ではなく喝采を優先」「カリスマ指導者の独裁」などと理解されることが多く、いわゆるデモクラシー論でも、正面から検討の対象とされないのが普通である。またヨーロッパの文脈では、ポピュリズム政党は右派政党であることが多く、極右由来のポピュリズムもあることから、ポピュリズムはデモクラシーに対して否定的・批判的であると見られがちである。

しかしポピュリズムの主張の多くは、実はデモクラシーの理念そのものと重なる面が多い。ポピュリズムの比較検討を行った政治学者のミュデとカルトワッセルは、少なくとも理論上は、人民主権と多数決制を擁護するポピュリズムは、「本質的に」民主的であるとす。

それはなぜか。ポピュリズム政党においては、国民投票や国民発案を積極的に主張する傾向がある。オーストリア自由党は、国民投票の広範な導入、首長の直接選挙などを主張し、フランスの国民戦線も、国民投票や比例代表制導入を通じた国民の意思の反映を主張してきた。またスイス国民党は、国民投票の制度を積極的に活用し、しばしば成功を収めている(第5章)。このような直接民主主義的諸制度は、まさにデモクラシーの本来のあり方に沿うものであり、「反民主主義」と一概にいうことはできないだろう。

現在、西欧のポピュリズムでは、右派であっても民主主義や議会主義は基本的な前提とされており、暴力行動を是認する、いわゆる極右の過激主義とは明らかに異なる。ポピュリストの多くは、少なくとも主張においては、「真の民主主義者」を自任し、人民を代表する存在と自らを位置づけている。

そのように見ると、各国のポピュリズム政党が標的とするのは、民主主義それ自体というよりは、代表者を通じた民主主義、すなわち代表制民主主義(間接民主主義)である、ともいえる。ポピュリズム研究で名高いタガートが述べるように、代表制の枠内で議論するよりも、代表制そのものに対する反発が、ポピュリズムの根底にある。

ポピュリズム政党は、代表者＝政治エリートが市民の要求を無視し、自己利益の追求に専念している、と批判する。そして島田幸典が的確に指摘するように、市民の要求を実現する回路をポピュリズム政党が真剣に求めていると見なされることで、むしろポピュリズム政党の主張が妥当性・正統性を獲得している面もある。ミュデたちの表現を使えば、ポピュリズムは、まさにデモクラシーの存在そのものによって生み出された存在

なのである。

(中略)

しかしそれではなぜ、ポピュリズムとデモクラシーの関係について、正反対の解釈が成り立つのだろうか。

(中略)

その背景にあるのは、近代デモクラシーを支える二つの原理の間にある、緊張関係である。

政治理論研究者の山本圭^{けい}が説明するように、近代デモクラシーには二つの説明(解釈)、すなわち「立憲主義的解釈」と「ポピュリズム的解釈」がある。

立憲主義的解釈は、端的にいえば、法の支配、個人的自由の尊重、議会制などを通じた権力抑制を重視する立場であり、「自由主義」的な解釈といえるだろう。他方、ポピュリズム的解釈は、人民の意思の実現を重視する。統治者と被治者の一致、直接民主主義の導入など、「民主主義」的要素を前面に出す立場である。

この二つの解釈の間には緊張関係があり、両者のいずれをとるかでポピュリズムへの評価が変わる。近代デモクラシーにおける自由主義の伝統を擁護する者はポピュリズムに警戒的であり、民主主義の伝統を擁護する者は、ポピュリズムに「真の」民主主義を見出すだろう、と山本は述べている。

この区別は、ポピュリズムに関するカノヴァンの画期的な論文「デモクラシーの二つの顔」におけるデモクラシーの二つの区分にも対応する。彼女は「実務型(pragmatic)」のデモクラシーと、「救済型(redemptive)」のデモクラシーの二つのデモクラシーを分ける。

まず、実務型のデモクラシーにおいては、ルールや制度の設定を通して紛争の解決を図ることが重視され、政治家や官僚らによる、日常のルーティン的な政治行政手続きが中心を占める。これに対し救済型のデモクラシーにおいては、主権者たる人民の活動を通して「より良き世界」を目指すことが必要とされ、制度やルールを超えた人民の直接参加が重視されるという。

そして実務型のデモクラシーが優位に立ち、救済型のデモクラシーがないがしろにされると、民衆の「疎外感」が広がり、その差を埋めようとしてポピュリズムが支持を広げる。ポピュリズムは職業政治家や官僚、利益団体によって民衆から遠く隔てられた政治のあり方を正し、人々の声を直接政治に反映することを訴えることで、人々の共感を得るのである。

デモクラシーにこの「実務型」と「救済型」の「二つの顔」があるとすれば、どちら

の要素もデモクラシーにとっては欠くことができない。彼女は言う。「デモクラシーを純粹に実務型に解釈することに逃げ込む試みは、幻想に終わる。なぜなら、実務型システムとしてのデモクラシーの権力と正統性は、少なくとも部分的には、その救済的な要素に基づくものであり続けるからだ。このことは常に、ポピュリズムの発生する余地を与えるだろう。ポピュリズムは、デモクラシーの後を影のようについてくる」。

このようにポピュリズムとデモクラシーの関わりを見てみると、ポピュリズムはデモクラシーを否定するものというよりは、むしろその一つの重要な側面、すなわち民衆の直接参加を通じた「よりよき政治」を積極的に目指す試みと、密接につながることがわかる。

(中略)

このことは、ポピュリズムといわゆるラディカル・デモクラシーとの関係を探ってみることで、一層明らかとなるだろう。

ラディカル・デモクラシーとは、近年の「新しい社会運動」や多文化主義、参加民主主義、討議デモクラシー論など、デモクラシーの深化を求める多様な運動・思想を指す。政治的な左右軸でいえば「左翼」に属する主張であることが多く、一見すると右翼的傾向の強い最近のポピュリズムの主張とは、左右の両極にある。

しかし実は、山本圭が指摘するように、両者には共通点も多い。多様な運動や経路を用いて人々の政治参加を促すラディカル・デモクラシーとポピュリズムは、代議制民主主義の機能不全を批判し、人々の直接的な参加により既存の政治の限界を克服しようとする点で、意外な一致を見せる。エリートではなく、草の根の人々の望みを実現しようとする点で、ラディカル・デモクラシーの議論はポピュリズムに接近している。

両派はいずれも、近代デモクラシーにおける「民主主義的」伝統を強調することで、既成の政治エリートによる支配を批判し、民衆の自己統治の回復を求める立場をとっており、批判する対象や、一般の人々に対する「期待」という点で、共通の土俵に立っているといえる。

(中略)

グローバル化の進展によって国民国家の枠組みが揺らぐなか、既成政治に対する人々の違和感が強まっている。そして人々の意思を反映しないように見える、既存の自由民主主義体制のあり方への根本的な問題提起を突きつける点で、ポピュリズムとラディカル・デモクラシーは合わせ鏡のように、支持を広げている。

このようにポピュリズムは、民衆の参加を通じて「よりよき政治」をめざす、「下」からの運動である。そして既成の制度やルールに守られたエリート層の支配を打破し、直接民主主義によって人々の意思の実現を志向する。その意味でポピュリズムは、民主

的手段を用いて既存のデモクラシーの問題を一挙に解決することをめざす、急進的な改革運動といえるだろう。

(中略)

それでは、ポピュリズムはデモクラシーの発展に寄与するといえるのか。この点について興味深い検討を行っているのが、先に紹介したミュデとカルトワッセルの二人である。二人はポピュリズムとデモクラシーの関係を、ラテンアメリカとヨーロッパの事例から多角的に検討したうえで、ポピュリズムはデモクラシーの発展を促す方向で働くこともあれば、デモクラシーへの脅威として作用することもある、と論じている。

まず、デモクラシーの発展を促進する面について見てみよう。

第一に、ポピュリズムは、政治から排除されてきた周縁的な集団の政治参加を促進することで、デモクラシーの発展に寄与する。ラテンアメリカで見られたように、権威主義的な統治エリートの支配に対抗し、民衆の参加を促し、自由かつ公正な選挙を実現するうえで、ポピュリズムの果たした役割は大きい。また、デモクラシーを実現した諸国においても、エリートによってないがしろにされていると感じる人々の意思を、政治的に表出する機会を与えることができる。「サイレント・マジョリティ」に政治参加の機会を提供することができるのは、往々にしてポピュリズムなのである。

第二に、ポピュリズムは、既存の社会的な区別を越えた新しい政治的・社会的なまとまりを作り出すとともに、新たなイデオロギーを提供することができる。すなわち、農民や労働者といった個別の社会集団の枠を越え、人民というまとまりを持った集合を生み出し、その人々の拠って立つイデオロギーを与えるのである。それにより、政党システムをはじめとする大きな変動が呼び起こされ、政治的な革新が可能となるという。

第三に、ポピュリズムは「政治」そのものの復権を促す。すなわち重要な課題を経済や司法の場に委ねるのではなく、政治の場に引き出すことで、人々が責任を持って決定を下すことを可能とする。またそれは、政治というものの持つ対立的な側面を呼び起こすことで、世論や社会運動の活性化につながるという。

このようにポピュリズムは、人々の参加と包摂を促進することでデモクラシーの実現に寄与するばかりか、すでに実現したデモクラシーをさらに発展させること、すなわち「デモクラシーを民主化する」うえでも、重要な意義を持つというのである。

しかし他方、ポピュリズムはデモクラシーの発展を阻害する面も持つ。

第一に、ポピュリズムは、「人民」の意思を重視する一方、権力分立、抑制と均衡といった立憲主義の原則を軽視する傾向がある。立憲主義において重要な手続きや制度は、人民の意志の実現を阻害するものとして批判される。特にそこで問題となるのは、多数派原則を重視するあまり、弱者やマイノリティの権利が無視されることである。

第二に、ポピュリズムには敵と味方を峻別^{しゅんべつ}する発想が強いことから、政治的な対立や紛争が急進化する危険がある。ポピュリズム対アンチ・ポピュリズムといった新たな亀裂が生まれたり、絶えざる政治闘争のなかで、妥協や合意が困難となるおそれがある。

第三に、ポピュリズムは人民の意思の発露、特に投票によって一挙に決することを重視するあまり、政党や議会といった団体・制度や、司法機関などの非政治的機関の権限を制約し、「良き統治」を妨げる危険がある。

このようにポピュリズムは、人々の参加と包摂を促す一方、権限の集中を図ることで、制度や手続きを軽視し、少数派に抑圧的に作用する可能性がある。ポピュリズムとデモクラシーの関係は、両義的といわざるをえない。

(以下略)

水島治郎『ポピュリズムとは何か』（中央公論新社、2016年）より抜粋。なお、本文中の小見出しは省略した。

2018年A日程論文試験問題 解説と講評

「出典」

出題は、千葉大学教授水島治朗（みずしま じろう）（著者の専門はオランダ政治史）の『ポピュリズムとは何か―民主主義の敵か、改革の希望か』（中公新書、2016年）から。大衆迎合主義ともとられる「ポピュリズム」についてわかりやすく解説した本である。

《問題1》-----

この問題文で書かれている内容を、この問題文をまだ読んでいない友人に紹介して伝えたい。この問題文で重要と思われる内容を要約したうえで、他者に紹介する文章を300字で作成しなさい。（配点40点）

【出題趣旨】

この文章では、ポピュリズムとデモクラシーとの関係(特にその功罪)が見事に示されているのが特徴的であり、その二面性を読み取りまとめる能力を発揮することが求められる。本問では求められた紹介文を、解答のために限られた時間と文字数の中でいかに要領よくポイントを押さえながらまとめ上げるかが問われている。説明的要約は、問題文における該当箇所をそのまま引き写すのではないことに留意すべきである。

【配点のポイント】

- (1) ポピュリズムを反デモクラシー的政治イデオロギーとみる見方の要約できていること。
- (2) ポピュリズムが権限の集中を図ることで制度や手続きを軽視し、少数派に抑圧的に作用する可能性などの「問題点」を指摘していること。

【解答例】

「ヨーロッパにおけるポピュリズム政党は右派政党であったり、極右由来の政党もあるため、ポピュリズムはデモクラシーに対して否定的・批判的であると見られがちである。しかし、ポピュリズムがエリート主義や官僚主義に対峙し、直接民主主義的諸制度を求める場合にはデモクラシーの本来のあり方に沿うとすることができる。他方、ポピュリズムは、人民の意思の発露、特に投票によって一挙に決することを重視するあまり、政党や議会といった団体・制度や、司法機関などの非政治的期間の権限を制約し、「良き統治」を妨げる危険がある。著者はこのようにポピュリズムはデモクラシーに対して両義的であるという。」（282文字）

【講評】

本文の要約であるから最も大事と思われる点を摘出し、まとめ上げる能力が問われている。友人に紹介するというので、手紙方式にした回答もあったが、あくまで「他者に紹介する文章」が求められているので様式は重要でない。一部をピックアップし、部分的、一面的な記述にとどまる答案が散見されたが、これでは全体の要約にはならない。

《問題 2》-----

ポピュリズムは民主主義にとって重要なものとするか、あるいは危険なものとするか、あなたはどちらの立場をとるかを示し、その理由を述べなさい。さらに、これに対して予想される批判を指摘したうえで、その批判に対する反論を理由とともに述べなさい。なお、解答に当たっては、問題文の内容に加え、自らの考える理由づけに依拠しても良いものとし、全体として約500字で解答するものとする。(配点60点)

【出題趣旨】

ポピュリズムと民主主義の関係について、これだけ明確に両義性が示されたのであるから、解答者が、まずどちらかの立場に立ち、さらに、その理由を示す能力と、選択した立場に当然予想されるであろう反論についてきちんと理解したうえで再反論することができるかの能力を発揮していただきたいと考えた。

【配点のポイント】

どの立場を取るかを明確にしたうえで、

- (1) その理由を著者の見解を中心として述べていること。(自らの考える理由を述べる際も、必ず本文中の根拠を示しておかなくてはいけない。)
- (2) 考えられる反対論をきちんと示していること。(自らの考える理由を述べる際も、必ず本文中の根拠を示しておかなくてはいけない。)
- (3) 反対論に対する再反論が文脈に沿った内容で説得力を持って示していること。

【解答のポイント】

A 「ポピュリズムは民主主義にとって重要なものとする解答のポイント例」

(1) 政党政治と直接民主制だけでは、複雑に入り組んだ利害関係や世論を効率的に政治に反映できなくなってきたことを温床にポピュリズムが育ってきた。「ポピュリズム」は、エリート支配への批判、民衆の直接参加といった「デモクラシー」の論理に基づき、国投票や住民投票に訴え、既成政治の打破を訴える。に、政治が一部のエリート層に独占されており、自分たちの声が届いていない、という不満が多くの国民にあり、彼らは「既成の政党」に不信感を抱いてきた。それは「決定権をエリートから大衆に取り戻す活動」

であるとも言えるし、民主主義の大元に立ち返ろうとしている。

(2) ポピュリズムによって決められることは、極端なものになりやすく、少数派を抑圧することが多い。

(3) 世界の多くの国で「民主主義」が信奉されているが、実際には「選良（エリート）」たちが政治を動かしている。その政策が不公正であったり、差別的であったとしても受け入れざるを得ないので、最終的に「国民投票」などを利用する民主主義的な制度が必要。

B 「ポピュリズムは民主主義にとって危険なものとする解答のポイント例」

(1) 第一に、ポピュリズムは、「人民」の意思を重視する一方、権力分立、抑制を均衡といった立憲主義の原則を軽視する傾向がある。立憲主義において重要な手続きや制度は、人民の意思の実現を阻害するものとして批判される。特にそこで問題となるのは、多数派原則を重視するあまり、弱者やマイノリティの権利が無視されることである。第二に、ポピュリズムには敵と味方を峻別する発想が強いことから、ポピュリズム対アンチ・ポピュリズムといった新たな亀裂が生まれ、絶えざる政治闘争のなかで、妥協や合意が困難となるおそれがある。第三に、ポピュリズムは人民の意思の発露、特に投票によって一挙に決することを重視するあまり、政党や議会といった団体・制度や、司法機関などの非政治的期間の権限を制約し、「良き統治」を妨げる危険がある。このようにポピュリズムは、人々の参加と包摂を促す一方、権限の集中を図ることで、制度や手続きを軽視し、少数派に抑圧的に作用する可能性がある。

(2) デモクラシーとポピュリズムが接点を持つものであり、ポピュリズムそのものがデモクラシーを危機に晒すのは限られた場合であり、むしろ野党（非政権党）としてポピュリズム政党が存在することはデモクラシーの活性化につながるとする。

(3) ポピュリズムは、政党や議会、利益集団といった、従来は政治的に重要であると考えられてきた諸アクターの意思決定をバイパスし、政治的リーダーと有権者とが直接的に結びつく政治手法となる。デモクラシーの基盤を成す議論が軽視され、「声」さえ集めればあらゆる行為が正当化される社会は、何が起こるのかはまったく予想がつかない。など。

【講評】

意外なことに、「ポピュリズム」への賛成または反対の評価は二分された。問いでは、「どちらの立場をとるか」が問われているのだから、それを明確にしないことにはあとが続かない。立場を明確にしたものの、今度は批判的意見に対して再反論する部分が弱く、最初の立場の理由づけの繰り返しになっている答案が多かった。この場合自らの意見を述べてもよいが、問題文の文脈から離れすぎると、単なる独自見解の吐露に終わってしまい、加点されにくい。

以上